Movie Review　37　＃聖地には蜘蛛が巣を張る

『＃聖地には蜘蛛が巣を張る』(2022 年：アリ・アッバシ監督）を amazon prime video で視聴した。本作は、2022 年にカンヌ国際映画祭のコンペティション部門（デンマーク作品）で上映された。終演で 7 分間に渡るスタンディング・オベーションを受けた。「16 人もの娼婦を殺害した実際の連続殺人事件を、繊細さを捨てた強く感情的な怒りに満ちた映画に変化させている」と批評家から賞賛されている。また、「監督は、この物議を醸した事件を、暴力的な追跡劇スリラーと、たとえ女性が冷酷な殺人事件の被害者であっても、常に何かの罪を犯しているような視線を向ける、イランの懲罰的な神権政治の制度に対する批判の両方に変換させて見せた。」と評し、さらに「イランという国が抱える問題点を明確にはっきりと観客に伝えようとしている。」と。もちろん、イランでは大不評である。

イラン女性ジャーナリストである R は巡礼者で賑わう聖地で発生した「蜘蛛殺し」と呼ばれる娼婦連続殺害事件を追っていた。捜査に消極的な警察に不信感を抱いた R は、地元の犯罪記者と手を組み、自ら囮となることで、犯人が退役軍人 S であることを突き止める。
16 人の娼婦を殺した罪で法廷に立たされても、S は神から授かった仕事として「街を浄化している」と胸を張る。町には彼の犯行を英雄視し、娼婦を憎む熱狂的な支持者がおり、裁判所の前には釈放を求めるデモ隊が集まった。判決として 12 回の死刑やムチ打ちなど多くの刑が確定した。牢に訪ねて来た有力な友人から、形ばかりの死刑執行の後に逃がすと保証され、落ち着き払って刑場に向かう S。結局 S は絞首刑となった。R たちが見ている前で、脱走は不可能だったのだ。仕事を終えて町を去る R。だが、彼女の撮影したインタビュー記録の中では、父親を英雄視している S の息子が、娼婦がいる限り第 2 の S は現れる。自分も後を継げと言われていると、誇らしげに父の殺人を再現していた。

恐ろしいのは、犯人が逮捕され、絞首刑がされてからである。（イランという）社会が連続殺人犯を欲しているのだ。イラン社会に根深く女性差別が残っている。その性差別は、歴史的に培われた文化的なものか？
殺人者の息子に連続殺人者となることを望む社会に虫唾が走る。

以下に見るように、「イスラム教における女性観」を上記のように一括りにするのは、誤解を招く恐れも潜んでいる。

イスラム教における女性観

1. 宗教的教義における女性の位置づけ

『クルアーン（コーラン）』では、男女はともに神の被造物であり、信仰や道徳的責任において平等であるとされている。性別ではなく信仰心が重視されている。一方で、男女の役割には違いがあるとされ、家庭内での責任や相続、証言などに関しては異なる規定が設けられている。

2. イスラム法（シャリーア）と女性

イスラム法は『クルアーン』と預言者ムハンマドの言行録（ハディース）を基に構築されており、女性の権利や義務もそこから導かれる。その解釈と適用は地域や時代によって大きく異なる。

3. 現代のイスラム社会における女性

イスラム圏の女性の地位は一様ではない。トルコやインドネシアのように女性の社会進出が進んでいる国もあれば、アフガニスタンのように教育や就労が制限されている国もある。また、ヒジャブ（スカーフ）やブルカの着用についても、信仰の表現として自発的に身につける人もいれば、社会的圧力や法的義務として強制される場合もある。

4. 誤解と偏見

イスラム教と女性差別が結びつけられることがあるが、実際にはイスラム教が誕生した 7 世紀当時、女性の地位向上を目指す改革的な側面もあった。たとえば、女児の間引きを禁止し、女性に相続権を与えるなどの進歩的な教えも含まれていた。

イスラム教の女性観は、単純な「抑圧」や「解放」といった二項対立では語れない、非常に繊細で多様なテーマである。